

中高6年間を見通したシラバスの作成(3)  
ーリーディングのシラバスー

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科  
八宮孝夫・加藤裕司・久保野雅史  
末岡敏明・寺田恵一・平原麻子

## 中高6年間を見通したシラバスの作成(3)

### ーリーディングのシラバスー

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科  
八宮孝夫・加藤裕司・久保野雅史  
末岡敏明・寺田恵一・平原麻子

本稿では、中高6年間を見通したリーディングのシラバスを提案する。6年間で2年間ずつ「基礎」、「実践」、「発展」の3期に分けて、それぞれ題材と活動について対象と指導目標を作成した。活動は、読解と音読に分けて指導目標を設けた。このような題材と活動の目標を基に、昨年度のリーディングの活動を中1から高3まで学年別に報告し、評価し、成果と課題を確認した。

キーワード : 中高6年間・シラバス・リーディング

#### 1. はじめに

本校の英語科では、1998年度より「中高6年間を見通したシラバスの作成」(5年計画)というプロジェクトに取り組んでいる。このプロジェクトを立ち上げた理由は、中高6年間を通してコミュニケーション活動をより系統的に、効果的に編成するためには、各段階でどのような目標と活動を設定したらよいかを研究するためである。英語科では、基礎期(中学1,2年)、実践期(中学3年、高校1年)、発展期(高校2,3年)の3段階に分けて、4技能別に英語科共通の目標と活動を5年計画で作成しているところである。

本プロジェクトは、以下のような5年計画で進行中である。

- ・1年次(1998年度): 先行理論・実践の調査、リスニングのシラバスと到達目標の作成
- ・2年次(1999年度): スピーキングのシラバスと到達目標の作成

- ・3年次(2000年度): リーディングのシラバスと到達目標の作成
- ・4年次(2001年度): ライティングのシラバスと到達目標の作成
- ・5年次(2002年度): シラバス試案の作成と今後の展望

本年度は、5年計画の4年次にあたるが、本発表は昨年すなわち3年次(2000年度)の研究と実践(リーディングのシラバスと到達目標の作成)の概要を報告するものである。なお、1年次と2年次の研究については、それぞれ『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告第39集』内論文、「中高6年間を見通したシラバスの作成(1)ーリスニングのシラバス」(鈴木文子他(2000))と『筑波大学附属駒場論集第40集』内論文、「中高6年間を見通したシラバスの作成(2)ースピーキングのシラバス」(寺田恵一他(2001))を参考にして頂きたい。

## 2. リーディングのシラバス

### 2.1. 本校のリーディングのシラバス試案

はじめに、本校で作成、検討中の「中高6ヶ年を見通したリーディングのシラバス」の試案を示す。基礎期、実践期、発展期の3段階に分けて、それぞれ題材と活動について対象と目標を記す。活動については、読解と音読に分けてそれぞれ目標を示してある。

#### (1)基礎期 (中学1、2年)

##### (a)題材

- ・身近で具体的な内容の事実文・説明文と対話文

##### (b)活動

###### ①読解

- ・文字通りの理解 (literal comprehension: read the lines)
- ・文 (sentence) の基本構造を理解し、文単位の意味を正確につかむ。

###### ②音読

- ・語句や文を正しい発音・リズム・抑揚で音読する。

#### (2)実践期 (中学3年、高校1年)

##### (a)題材

- ・やや抽象的な内容の事実文・説明文、及び易しい物語・小説等

##### (b)活動

###### ①読解

- ・推論的理解 (inferential comprehension: read between the lines) をすすめる
- ・段落 (paragraph) の構造を理解し、文章 (passage) の概要・要点をつかむ。物語の登場人物の性格・心情等を読みとる。

###### ②音読

- ・理解した内容が表現されるように音読する

#### (3)発展期 (高校2、3年)

##### (a)題材

- ・様々なスタイルの、精神年齢に応じた内容の文章

##### (b)活動

###### ①読解

- ・評価的理解 (evaluative comprehension: read beyond the lines) をすすめる。
- ・複雑な内容・構造の文章 (passage) を正確に精

読する。

- ・斜め読み (skimming)、走査読み (scan-ning) 等の読みの技術を身につける。
- ・読みの速度を上げ、限られた時間でより多量の文章の概要・要点をつかむ。

###### ②音読

- ・文章の内容に応じて適切に音読する。
- ・表現読み (oral interpretation) 等の活動を通してスピーキング力も伸ばす。

### 2.2. 新『学習指導要領』における

#### リーディングの扱い

2002年度から実施される『中学校学習指導要領』と2003年度から実施される『高等学校学習指導要領』で、「読むこと」に関係すると思われる箇所を抽出する。『学習指導要領』においても、音読は「読むこと」の範囲で扱われている。

#### 2.2.1 『中学校学習指導要領』

「言語活動」の「読むこと」について主に次の事項について指導するように記載されている。

- (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。
- (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。
- (ウ) 物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読みとること。
- (エ) 伝言や手紙などから書き手の意向を理解し、適切に応じること。

#### 2.2.2 『高等学校指導要領』

##### (1) 英語Ⅰと英語Ⅱ

「言語活動」に以下の記載がある。

- イ. 英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとられえたりする。

また「言語活動の取扱い」には以下のように書かれている。

- ウ. まとまりのある文章を音読したり暗唱したりして、英語の文章の流れに慣れること。

##### (2) リーディング

「言語活動」は次のように書かれている。

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようにコミュニケーション活動を行う。

ア. まとまりのある文章を読んで、必要な情報を得たり、概要や要点をまとめたりする。

イ. まとまりのある文章を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えなどをまとめたり、伝えたりする。

ウ. 物語文などを読んで、その感想などを話したり、書いたりする。

エ. 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する。

### 2.3. 海外のシラバス

具体的に行動目標を記述した海外のシラバスとしては、イギリスの Department for Education and Employment (2000)が作成した *National Curriculum* と、カナダの The Centre for Canadian Language Benchmarks (2000)の *Benchmarks* (2000)が有名である。ここでは、紙幅の関係で前者の *Modern Foreign Languages* からリーディングに関するシラバスに限って引用する。

#### Attainment Target 3: Reading and Responding

##### ■Level 1

Pupils show that they understand single words presented in clear script in a familiar context. They may need visual cues.

##### ■Level 2

Pupils show that they understand short phrases presented in a familiar context. They match sound to print by reading aloud single familiar words and phrases. They use books or glossaries to find out the meanings of new words.

##### ■Level 3

Pupils show that they understand short texts and dialogues, made up of familiar language, printed in books or word-processed. They identify and note main points and personal responses [for example, likes, dislikes and feelings]. They are beginning to read independently, selecting simple texts and using a bilingual dictionary or glossary to look up new words.

##### ■Level 4

Pupils show that they understand short stories and factual texts, printed or clearly handwritten. They identify and note main points and some details. When reading on their own, as well as using a bilingual dictionary or glossary, they are beginning to use context to work out what unfamiliar words mean.

##### ■Level 5

Pupils show that they understand a range of written material, including texts covering present and past or future events. They identify and note main points and specific details, including opinions. Their independent reading includes authentic materials [for example, information leaflets, newspaper extracts, letters, databases]. They are generally confident in reading aloud, and in using reference materials.

##### ■Level 6

Pupils show that they understand a variety of texts that cover past, present and future events and include familiar language in unfamiliar contexts. They identify and note main points and specific details, including points of view. They scan written material, for stories or articles of interest, and choose books or texts to read on their own, at their own level. They are more confident in using context and their knowledge of grammar to work out the meaning of language they do not know.

##### ■Level 7

Pupils show that they understand a range of material, imaginative and factual, that includes some complex sentences and unfamiliar language. They use new vocabulary and structures found in their reading to respond in speech or in writing. They use reference materials when these are helpful.

##### ■Level 8

Pupils show that they understand a wide variety of types of written material. When reading for personal interest and for information, they consult a range of reference sources where appropriate. They cope readily with unfamiliar topics involving more complex language, and recognise attitudes and emotions.

## ■Exceptional performance

Pupils show that they understand a wide range of factual and imaginative texts, some of which express different points of view, issues and concerns, and which include official and formal material. They summarise in detail, report, and explain extracts, orally and in writing. They develop their independent reading by choosing stories, articles, books and plays according to their interests, and responding to them.

### 本校におけるリーディングの活動の実践

本校のリーディングのシラバスに従い、実践の報告は各期ごとに、(1)読解(reading comprehension)の分野と(2)音読(oral reading—recitationを含む)に分けて行った。

#### 3.1. 基礎期

##### 3.1.1. 中学1年の実践(54期生)

中学1年では、指導内容からリーディングの指導は限られたものになるが、その限られた中でどのようにリーディングの指導をしてきたかを簡単に報告したい。

##### 3.1.1.1. 読解の指導

###### (1) 教科書

また、内容理解に関しても、中1レベルでは、教材が易しいのでほとんどの生徒は十分理解できている。ただ、こつこつと学習する習慣がついていない生徒がいるので、プロダクションの段階で、正確な英語が書けないということはよくあることである。

###### (2) 副教材

中学1年では、この年には、3学期にリーディング用の教材として、*The Adventures of Sherlock Holmes* (桐原書店)から、*The Resident Patient*に挑戦した。易しくライトされているもので、文法事項も制限されている。例えば、関係代名詞は出てこない。ただ、過去形については本校の教科書では、中1では一般動詞だけなので、be動詞の過去形について前もって指導しておく必要があった。意味がだいたいとれば良いということを目指した。もちろん、1ページに1つか2つ出てくる重要な文法事項は正確に理解することを要求した。これらの目標はほとんどの生徒は達成できた。

参考までに、冒頭の部分を以下に引用する。

One October evening Sherlock Holmes and I returned to our rooms. I was living with him. My wife died in 1894. So I moved to Baker Street. There was a man in our waiting room. He was about thirty-three or thirty-four. He looked very tired. "Good evening," Holmes said, "Can I help you?" "My name is Percy Trevelyan. I'm a doctor. I live at 403 Brook Street."

##### 3.1.1.2. 音読の指導

教科書に関しては、とくに音読に重点を置いて指導した。イントロダクションのあとに、テープを聞き、教科書の本文の説明・文法事項の口頭練習、語彙の説明などを行い、内容が理解できた後で、もう一度テープを聴き、その後で単語の発音練習と本文の音読をテープのあとに続けて行う。その後で、必ず何人かの代表の生徒にあてて音読させている。本文が対話文のときは、対話の形になりクラスの雰囲気も盛り上がる。代表の生徒に音読させる際にうれしく思ったことは、生徒が積極的に、他の生徒の前で読みたいらしく、指名されないと授業のあとで、指名してほしかったなどと言う生徒もいたことである。LLの授業で集中的なタスク・ペイスト・リスニングの訓練を行っているので、教科書程度の英文の音読は、ほとんどどの生徒がよどみなく読むことができる。発音に関しては、音読のあとで発音の注意をいつも行なわなくてはならず、まだ指導が十分でないことを痛感している。中1の段階で発音をしっかり押さえておかないと、学年が進んでも改善しないからである。

##### 3.1.2. 中学2年の実践(53期生)

###### 3.1.2.1. 読解の指導

###### (1) 教科書

###### (a) プリントの活用—単語と文法の理解

中学2年のような基礎期には、単語と文法について正確な知識を身につけることが読解力の形成のために重要であると考え(本校のシラバスの基礎期の活動目標として「文(sentence)の基本構造を理解し、文単位の意味を正確につかむ」とある)、新しいパートに入るたびに配布したプリントには単語については例文を、文法については例文と練習問題を主にのせた。(補足資料1)単語のテストは一課終わるごとに実施して(10点満点)、1学期末の成績に加えた。

(b) 指示語や接続詞に注目一文と文のつながりの理解  
中学2年生の教科書になると英文がやや難しくなり、文脈の把握が重要になる。まず、代名詞などの指示語や接続詞に注目させ、文と文のつながりを把握させるように努めた。

(c) 主題文に注目一段落の構造の把握

中2の教科書では各段落が一つのまとまった内容を表すことが多くなる。段落で最も中心になる考えを表す文(topic sentence)を捜させたり、例示を示す語句(for example)に注目させたりして、ポイントの部分と例示の部分を区別させた。

(d) インターネットの利用—背景的な知識の説明

Let's Read 2 *Mongolia—A Country of Grass* と Lesson 11 *Kenya* については、インターネットのホームページから背景的な情報を入手して中2用に易しく書き直して、プリントを作成した。(補足資料2)

(2) 副教材

夏休みの宿題

2学期に授業で扱う予定だった Let's Read 1 *Alice's Adventures in Wonderland* に関連して、*Alice in Wonderland* (500 語レベル: Longman) を補助プリントと一緒に渡して、このテキストの最後にある内容の理解に関する問題を宿題にした。2学期の授業でも、Let's Read 1 で扱われている3つの異なった場面に相当する箇所を Longman 社のテキストから選んで、比較して解説した。

(3) 授業における活用

3学期に、*The Red-Headed League (The Best Sherlock Holmes Stories)* (Arthur Conan Doyle)、1000 語レベル: 英潮社) を使用した。補助プリントを6枚活用して、7回の授業で扱った。細部にこだわるよりも、ストーリーを楽しく読ませることを授業のポイントにした。

3.1.2.2. 音読の指導

(1) モデルリーディング

音読は教科書 (*New Crown English Series—New Edition 2*) 附属のテープや私自身のモデルリーディングに従って行った。毎回授業でコーラスリーディングを行った後に、インディビジュアルリーディングを行

い10名前後の生徒を指名した。単語の発音を指導する際には、特に日本語にない音(音素)に注意を喚起した。センスグループや文を音読する時は意味を考えながら発音するように指導した。

(2) リードアンドルックアップ

音読はスピーキングの基礎になる活動であるので、活動の最終的な目標としてリードアンドルックアップができるようになることをめざした。毎学期末に行うスピーキングのテスト(「中高6年間を見通したシラバスの作成(2)—スピーキングのシラバス」(寺田恵一他(2001))のp.97-98参照)では、生徒に聴衆の方を見て話すように指導したが、音読におけるリードアンドルックアップはこれにつながる活動である。

(3) ペア練習

対話文から構成されているレッスンでは、音読の仕上げにペア練習を取り入れた。各組は41名の生徒数なので、私もパートナーを決めてペア練習を行った。この練習の時も相手の目を見て話すように指導した。全体練習が終わった後に、2,3組のペアに教室の前に来て音読をさせることを時々行った。

3.2. 実践期

3.2.1. 中学3年の実践(52期生)

実践期(中学3年・高校1年)の題材は、「やや抽象的な内容の事実文・説明文」である。これは、基礎期(中学1・2年)の「身近で具体的な内容の事実文・説明文」を発展させたものである。また活動は、基礎期の「文の基本構造を理解し、文単位の意味を正確につかむ」という「文字通りの理解」を発展させて、「段落の構造を理解し、文章の概要・要点をつかむ、物語の登場人物の正確・心情等を読みとる」という「推論的理解」を目標としている。

3.2.1.1. 題材

(1) やや抽象的な内容の事実文・説明文

このような内容の文章は教科書には余り登場しない。そこで、以下のような副教材を採用し、授業中や家庭学習での課題として取り組ませることにした。

2学期: Start with English Readers 5: *People and Things* (Oxford University Press)

3学期: Start with English Readers 6: *The World around Us* (Oxford University Press)

*The World around Us*の中から、地球に関する文章の一部を抜粋する。

### *The Earth*

How do we know that the earth is like a ball? For one thing, if people travel around the earth, they come back to the same place. Also men have taken pictures from balloons, aeroplanes and spacecraft. In the pictures we can see that the edge of the earth is round. But the picture on page 3 shows how men first saw that the earth is like a ball. If you look at a ship coming from far away, you first see the top of the ship(1). Then, later, you see all of it(2). If you stand on a high place, you may see another ship which someone in a lower place cannot see(3).

(1)-(3)はイラストの番号)

シラバスの「段落の構造を理解し」に関連した活動例を紹介する。ある段落を構成する文を全てシャッフルしておき、内容の一貫性 (coherence) や結束性 (cohesion) を手がかりに、それを正しい順序に復元する活動である。

<TASK> 文と文とのつながりを考えて、段落を復元しなさい。

- ① Those things interested European people very much.
- ② They took out pottery, *ukiyoe* pictures and many other things from *Dejima*.
- ③ Some European countries asked Japan to trade with them.
- ④ Many years later, van Gogh was influenced by *ukiyoe* pictures.
- ⑤ Japan agreed, but only the Dutch were able to trade for a long time.

(解答は、③ → ⑤ → ② → ① → ④)

内容の一貫性 (coherence) の点から正しい順序に復元するには、文の主語に着目して、  
Some European countries asked Japan...  
→Japan agreed, but only the Dutch...  
→They took out ...  
→Those things interested European people...

→ van Gogh was influenced ...

のような「つながり」を見いだすことができる。

また、結束性 (cohesion) の点から正しい順序に復元するには、代用表現等に注目して、

Some European...

→..., but only the Dutch...

→They took out... many other things ...

→Those things...

→Many years later, ...

のような「つながり」を見いだすこともできる。

このような活動を繰り返すことによって、文と文のつながりを意識して文章を読みとる力を育成することができると考えている。

### (2) 易しい物語・小説

一方「易しい物語・小説」に関しては、下に示したように *New Crown English Series 3* 以外の検定教科書を利用した。題材の選定基準は、その時点で学習しているよりも語彙・文法面で易しいものを基本とした。これは、未習事項のない文章を適切な速度で読みとる活動をさせるためである。適切な速度の目安としては、教科書の音読テープや Voice of America と同様に 1 分間に 100 語程度のスピードを設定し、200 語の文章ならば 2 分間で一気に読みとらせた。

題材としては、以下に示すようなものを使用した。

- ・ *New Crown 2* (旧版) : 現行版では削除された課
- ・ *New Crown 3* (旧版) : 現行版では削除された課
- Sunshine, Horizon, Total, Everyday* 等の未習事項のない課

シラバスの「登場人物の性格・心情等を読みとる」例として、*New Crown 2* (1993 年度版) の巻末の付録読み物「注文の多い料理店」の冒頭部分を引用する。

### *The Restaurant of Many Orders*

Two young gentlemen lost their way when they were hunting in a forest. It was a weird forest. Their two dogs suddenly disappeared.

Just then, they saw a sign in front of them. It said:

#### WILDCAT RESTAURANT

"Oh, we are lucky," said one of them.

"Yes. I'm very hungry. Let's go in. We can ask the way back home too," said the other.

このような文章は、実践期の「理解した内容が表現されるように音読する」素材として恰好である。

### 3.2.1.2. 音読の指導

モデルリーディングのテープに倣って音読する練習から、意味の区切れ（チャンク）を自分で見つけて適切なイントネーションで読む力を、中学校卒業までに身に付けさせることが必要だと考えた。そのため、3.2.1.1.の活動で読みとらせたテキストに関しては、以下①～③に示すように、敢えてテープを聴かせずに、自力で音読させて内容が適切に音声化できているかどうかをチェックした。この過程は「意味と音声を対応させる力」を身に付けさせるためには是非必要な活動だと考えられる。

- ①時間を限って黙読させ、内容を読みとらせる。
- ②理解した内容を「どのように音声化するか」意識しながら、再度黙読する。
- ③指名しながら音読させ、「なぜ、そこで区切るのか？」「なぜ、そのようなイントネーションになるのか？」などを適宜質問する。

具体的な様子を、*The World around Us* のオリンピックの歴史に関する文章を使って説明する。

#### *The Olympic Games*

The Olympic Games began in Olympia, in Greece, in 776 B.C. (B.C. means before the birth of Christ). They took place from time to time until A.D. 393. Then they stopped. At first they lasted only one day and there was only one race. Later there were more races and other contests and the Games lasted several days. People all over Greece took part. (下線・太字は引用者による)

下線部にある二つの and の発音は大きく異なる。それは、それぞれが何を接続しているかの違いに起因する。もし、ある生徒が

Later there were more races // and other contests and the Games ... (//はポーズを示す)

と音読したとする。この生徒の誤りは

- ①内容が読みとれていない（文の構造が解析できていない）。
- ②内容は理解できているが、それを適切に音声化する力が身に付いていない。

の、どちらかである。母語である日本語の場合は、音読の誤りは即、①内容理解の誤りと考えられる。しかし、外国語である英語の場合は、②の場合がかなりの割合を占める。

そこで、二つの and の役割を

more races and other contests <単語+単語>

there were more ... and the Games lasted ...

<文+文>

と理解させた上で、<単語+単語>の and は弱く/n/のように発音し、<文+文>の and の場合は直前にポーズを置き、強く発音する、というようなルールを明示的に説明して理解させることが必要である。

当然のこと最初のうちは、意識的に考えながら音読することになる。しかしこのような宣言的知識 (declarative knowledge) は、練習の繰り返しによって内在化して手続き的知識 (procedural knowledge) へと転化する。ルールを意識せずに「内容に応じて適切に音読出来る」という技能を身に付けさせるためには、このような指導を徹底することが不可欠である。

このような練習を積み上げていけば、教師やテープのモデルなしで自力で音読できる力を身に付けさせることができる。この段階までは、実践期前半（中学校卒業）までに何としても到達すべきであろう。

### 3.2.2. 高校1年の実践 (51期生)

高校1年生では「読むこと」に関する授業は主に3単位の英語 I の中で行われた。教材は教科書として *SPIRAL ENGLISH I* (一橋出版) の他、多数のプリント教材 (年間で 50 枚程度) を使用した。プリント教材は基本的に教科書の題材に関連する英文を新聞や雑誌、あるいはインターネットから探してきたものである。教科書の英文には学習目的のために様々な加工が施されているため、プリントでは意識してオーセンティックな英文を取り上げた。

#### 3.2.2.1. 題材

本校のリーディングシラバスに於いて高校1年生は「実践期」の後半にあたる。大まかな言い方をすれば、実践期として扱われるべき題材のうち、より高度な内容のものを扱うのが高校1年生であるということになる。

実践期に扱う題材として「やや抽象的な内容の事実文・説明文、および易しい物語・小説等」と書かれている。同じ実践期でも前半の中学3年生と後半の高校1年生とでは教科書をはじめとした教材の内容がかな



り異なる。まず事実文・説明文に関しては、「やや抽象的な」となっているが、中学3年生の段階では抽象的な内容の英文はほとんど出てこない。「平和」や「差別」などの抽象的なテーマを扱った課もあるが、記述内容自体は具体的であり、決して抽象的なロジックを展開させていくような文章ではない。そこで、高校1年生では、抽象的な内容の事実文・説明文として、易しいものから難しいものへとステップを踏んで多くの教材を扱った。本校で使用する教科書は本校の生徒にはかなり易しいものなので、最初のステップには適している。その後、やや難しい教材として、新聞の社説やそれと似たスタイルのエッセイ等を取り上げて事実文・説明文の記述に慣れさせていった。なお、事実文・説明文として、数学や科学の入門書には易しくて生徒の興味を引くような題材が多く見られるので、授業ではそれらを頻繁に取り上げた。また、新聞のスポーツ記事（試合結果の報道ではなくて、ある選手やあるチームについて詳細に記述した文章）も同様の理由で教材として扱った。

### 3.2.2.2. 読解の指導

リーディングシラバスの実践期の活動（①読解）には「段落(paragraph)の構造を理解し、文章(passage)の概要・要点をつかむ」とある。実践期で扱う事実文・説明文は、量的にも質的にも次第に高度になるので、パラグラフの構造を理解させるのに適した時期であるといえる。

パラグラフというものを初めて理解させようとする場合、トピック・センテンスやサポーティング・センテンスの存在が明確で、パラグラフ構造が型どおりに構成されているような文章を利用すべきである。そのような文章を用いて、まず生徒に理解させるべきことは、文章を構成する一つ一つの文は決して同じレベルで書かれているのではないということである。抽象度の高い文と低い文、事実を述べている文と筆者の主張を述べている文、一般的な考え方を述べている文とそれに対する筆者の反対意見が述べている文等々、様々な文の特徴を理解させ、それらの文が一つのパラグラフの中でどのように配置されているかを観察させる。続いて、複数のパラグラフがどのように組み合わせられて文章全体が構成されているのかを考えさせる。国語の授業も含めて、文章をこのように分解したり構築したりする練習をしたことがないので、生徒たちは最初はとまどいを見せるが、活動を続けているうちに、パズル的な面白さに気づき、また、パラグラフの理解

が文章の理解や概要把握に有効であることが体感できるようになる。

リーディングシラバスの実践期の活動（①読解）には、さらに「物語の登場人物の性格・心情等を読みとる」とある。同様の活動は国語の授業内ではよく行われていることなので、それを英語を通して行えるようになることがポイントとなる。

### 3.2.2.3 音読の指導

高校1年生における音読指導のポイントは2つある。まず、上に述べた「物語の登場人物の性格・心情を読みとる」という読解活動の発展としての音読である。英語が正確に読みとれていれば、登場人物の性格・心情を掴むことはさほど難しいことではない。英語の授業としては、むしろ読みとった内容を正しく音読で表現する、という方向に力を注ぐべきであろう。教科書の付属テープはあまりいい模範となるような音読ではないので、一流の俳優等が音読したテープを用意するか、あるいは映画などを見せてその中でどのように感情を込めて台詞を言っているかを観察させるとよい。

音読指導の2つ目のポイントは、音読指導のためにどこまで時間を割くか、という問題である。特に高校生になると教材の分量が飛躍的に増大するので、そのすべてを音読指導の対象とすることはできない。たとえ教科書本文だけに絞っても、そのすべてを生徒がきちんと音読できるようにさせるには、授業時間だけではとても足りない。しかし、学年が進行するにつれて生徒が英語を口にする機会が減っていくので、音読指導の機会は確保するようにしたい。そこで、次のような方針で音読指導を行うことにした。

- (1) 音読指導を重点的に行う課を決める。
- (2) 文章全体を音読の対象とはせず、文章の中で特徴的なパラグラフ（例えば、筆者の主張が最も強く込められている箇所や登場人物の性格・心情がよく表れている箇所など）で重点的に音読指導を行う。

この(1)と(2)に当てはまらない課に於いては、最低でも新出単語の音読だけは行い、授業で時間が余った場合などに行える限りの音読練習を行うようにした。

また、授業内ですべてをまかなうことはできないのであるから、自宅学習用の音声教材を渡したり、ラジオやテレビの語学番組を奨励したりすることも行い、

少しでも多く音読の機会を増やすよう促した。

### 3.3. 発展期

#### 3.3.1. 高校2年の実践(50期生)

高校2年生の英語IIは週4時間のうち、3時間を日本人教師による「読む」「書く」に重点をおいた授業、1時間を日本人教師とイギリス人教師による「聞く」「話す」に重点をおいたティームティーチング、という形態で行った。本稿では日本人教師による3時間分の実践について報告する。教材は、教科書 *SPIRAL ENGLISH II* (一橋出版) のほか、自主制作教材を多用した。

##### 3.3.1.1. 読解の指導

###### (1) 1学期(教科書中心の指導)

検定教科書を使い、精読中心の授業を行った。この時期に文法事項として「仮定法」と「分詞構文」の指導も行い、物語や難易度の高い文章が読めるようになる下地を作った。教科書でチャールズ・シュルツ氏の伝記を読んだので、漫画 *Peanuts* から20点ほど選んで読み、何が笑いのポイントかを考えたり、自分なりの訳をつける練習もさせた。生徒は楽しみながら学習に取り組んでいた。

###### (2) 夏休みの課題(まとまった物語を読む)

生徒が自分の英語力と興味に応じて選べるように、課題図書を2種類提示して好きなほうを読ませた。両方とも巻末に読解問題がついている本で、この問題をレポート用紙にやり夏休み明けに提出することを課題とした。生徒によっては両方とも読破したり、全文を自分なりに翻訳してみた者もいた。

課題図書1 *The Body* by Stephen King (Penguin Readers 2300 語レベル)

課題図書2 *Banker* by Dick Francis (Heinemann ELT 1600 語レベル)

###### (3) 2学期(オーセンテックな教材を読む・速読多読の指導)

毎回300~500語程度の読み物を初見で読ませ、内容把握を中心とする授業を組み立てた。使った教材と扱い方の一部を紹介する。

① *Harry Potter and the Philosopher's Stone* by J. K. Rowling (Bloomsbury Publishing Plc): 第1章

を9回に分けて読んだ。授業は、難しい単語・熟語の確認→本文の黙読→内容把握の問題・解説、という流れを基本とした。内容把握の設問は、True or False 形式、英問英答、部分英作文、日本語による要約、などバリエーションをつけ、「読む」だけではなく「書く」「聞く」「話す」の演習ができるように心がけた。授業をきっかけに物語に興味を持ち、原著を全て読んだ生徒もでてきた。

② アメリカ大統領選挙を扱ったニュース記事:「週刊ST」や *Japan Times*, *The Daily Yomiuri* などから適宜記事を選び、ちょうど大混乱していたアメリカ大統領選について、社会的な知識も補充しながら読み進めた。多くの時事用語を学んだ。

###### (4) 3学期(パラグラフリーディングの指導)

この時期はまとまった英文の構造に目を向け、どのようなことに気をつけながら読むべきかを集中的に指導した。指導項目は、文章の構成・パラグラフとは?・トピックセンテンス・マーカー(論理展開指示語)・パラグラフの種類<原因結果・対比等>・要約文の書き方、などである。すべて自作の教材を使って授業を行った。このような指導の結果、生徒はただ漫然と文章を読むのではなく、論理展開を意識しながら戦略的に読み進める態度がある程度身についた。また英文を書く場合も、パラグラフをいかに構成するかという視点をもって取り組むことができるようになった。

##### 3.3.1.2. 音読の指導

週3時間という限られた時間内でリーディングの基礎力と文法の運用力をつけることを目標としていたため、音読指導にはあまり時間をさけなかった。主に行ったことは次の2点である。1) 新出単語の発音とアクセントの確認、特にコミュニケーション上の障害になりやすいアクセントを正しく身につけることを重視した。2) 十分に内容を理解した文章を、聞き手に意味が伝わるように工夫をして読む練習。特にポーズの置き方とイントネーションやリズムに注意を払って音読するように指導した。

#### 3.3.2. 高校3年リーディングの実践(49期生)

##### 3.3.2.1. はじめに

高校3年生においては「リーディング」という授業が科目として存在するのであって、4技能の一つであるリーディングをまさにフルに生かせる場が与えられているわけである。その意味で、リーディング力を伸

ばすための締めくくりの学年といっただろう。では、リーディング力を伸ばすにはどの点に重点をおいて指導すればよいだらうか。

### 3.3.2.2. 指導上の重点

現行の指導要領で「リーディング」という科目の「言語活動」の項を見てみると以下のとおりである。

- ア. まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること。
- イ. 目的に応じて文章の内容を整理して読み取ること。
- (ウ, エはリーディングに付随しての活動なので後述)

これを見ると、アでは1文1文の理解より全体としての理解に重点を置くべきこと、イでは、目的に応じてスキミングやスキミング、速読などの技術を身に付けさせること、と取れそうである。

同じ「リーディング」の「内容の取り扱い」の項では以下のように述べている。

- (1) 言語材料の理解だけにとどめず、内容の把握を重視して指導するものとする。
- (2) 文章や段落の構成、文脈の展開などを踏まえて読み取るよう指導するものとする。

(1)で述べているのは、表面の理解だけでなくいわゆる「行間を読む」ということであろうし、(2)はパラグラフ構成などを意識せよ、ということである。筆者としては、この「内容の取り扱い」に述べられていることを重視したい。「言語活動」のほうにあるような「目的に応じて」異なった読みをする、というのはかなり高度なことであり、これは語彙や背景知識などが相当ないと技術としても使い物にならない。逆に言えば、これらの力がついてくれば自ずと読むスピードも上がり、要点なども見えてくる。したがって、筆者は(1)「行間の読み」も含めた内容のしっかりとした把握、(2)文と文のつながりやパラグラフ構成の理解、という2点に指導の重点をおきたい。

### 3.3.2.3. 具体的な指導

上記2つの項目で、具体的に指導しやすいのは(2)の項目からだと思われる。つまり形から入っていけるからで、(1)の「行間を読む」ほうは、もっと大きな文脈の理解を必要とするからである。したがってここでは、(2)を初めに取り上げる。

(a) 文と文のつながり、パラグラフ構成：論理的な文章を例に一読解の指導(1)

パラグラフというのは、幾つかの文が集まった意味のまとまりであるから、その前段階として、文と文とのつながり、を意識させる指導というものがある。文と文のつながりとは言い換えれば「結束性(cohesion)」ということで、Halliday M.A.K. & Hasan, R. (1976)によればこれを担う文法的要素には次のようなものがある。

- ①指示(reference): 人称代名詞、指示代名詞、限定詞、指示副詞などにより既出内容を指し示す。
- ②代用・省略(substitution/ellipsis): 支柱語 one、代動詞 do (so)によって既出表現の繰り返しを避ける。また既出表現を省略することで、2文を関係づける。
- ③接続表現(conjunction): 接続詞、前置詞句、副詞句を含む、接続表現によって2文を関係づける。
- ④語彙的結束(lexical cohesion): 既出の表現を繰り返したり、それと関連する語(上位語、類語、対語など)を用いて2文を関係づける。

これは目新しいことではなく、英語I・II、あるいは中学の英語でも、「このitが指すものは？」などという質問はよくなされる。しかし、4)の語彙的結束などは、必ずしも同じ表現を用いるとは限らず、関係がつかみにくい場合がある。また、文章全体の中で、それぞれの指示詞や接続詞が機能しているかということ意識させることは意味のあることである。具体的には、指示詞などの把握が出来ていれば指摘可能であろうと思われるような部分を( )にしておき、語彙を補うような問題が考えられる。場合によっては選択語彙を出しておいてもよい(補足資料3)。

結束性は文と文の単位を超えて、パラグラフとパラグラフにまたがることもある。しばしば、あるパラグラフのはじめの文は、その直前のパラグラフで話題になっている内容をあらわすような名詞表現になっていることが多いからである。例えば、This sort of opinion can be seen particularly in the society where … で始まる段落では、同然、その直前の段落で何らかの意見が述べられているとわかる。また、On the other hand, のような接続表現で始まっていけば、その前後のパラグラフは対比関係になっていることが予想される。

今見たように、パラグラフについても語彙レベルの

結束性がかなり生きてくるが、パラグラフ構成となると、別のアプローチも考えられる。しばしば指摘されるように、特に論理的な文章（論説文、説明文など）には topic - support - conclusion のような典型的なパターンが多い。そのような典型的な文章を読ませ、理解の確認をした上で、指示詞の指すものや、パラグラフ全体の構成などをチャートにしたもので示し、学習者に意識付けさせる。徐々にチャートに( ) など設けて、学習者自身で文章の構成を完成させるようにする（補足資料4）。最終的には、いくつかヒントになる設問によって、自力でチャートが作れるようにする。このようにすると、論理的な文章を読む際には頭の中で文章の構造を考えながら読むことに慣れていくと思う。

(b) 「行間を読む」ための指導：文学作品を例に一読解の指導(2)

「行間を読む」という表現は感覚的なものであるが、要するに、ある文が文字通りの意味以上に示す含意 (inference) を読み取るとでもいったらよいだろうか。文章の中には、上で見たような論理的で結束関係も目に見える形であるものばかりとは限らない。例えば、戯曲のようなものでは、しばしば次のような会話が登場する。

- A: That's the telephone.  
B: I'm in the bath.  
A: OK.

上の会話には、Halliday のというような目に見える形での結束性はない。一見それぞれ別の内容を語っているかに見える。しかし、読み手はここで「2人は意味のある会話をしているのだ」と想定することでBの発話を I'm in the bath, (so I can't answer it) という意味であろうと理解する。これは前後の関係で2人が同じ家にいるとか夫婦関係だとかがわかっていたら余計はつきりする。このような例は日常でもよく見られ、「行間」というには単純すぎる例かもしれない。しかし、文学作品などでは、登場人物の関係や、置かれている状況を理解してはじめて、発話の真意がわかるような場合があるものである。ある短編で次のような例がある。

主人公が市民農園で夕方遅くに精を出している男を見て “You are working late” と声をかける。ところが男は “If you call it work,” とそっけない返事

をする。主人公が “The peas have come on well.” とほめると、男は “Yes, they're doing fine.” と、これまたそっけない。こんな調子で2人に会話はしばらく続くが、別れ際の男の言葉で、実は出兵していた男の息子がその午後亡くなった知らせが入り、気を紛らわせるために農園にきたことが明らかになる。ここにいたって、それまでの男のそっけない言葉の持つ意味が鮮やかに浮かび上がってくる “Yes, they're doing fine.” という台詞も息子の死との対比での発言かもしれない、と思えてくる。また、この短編は It was a summer evening in 1942. という文で始まるのだが、これも戦時中であるということを示す伏線だったのだ、ということがわかってくる。

この例のように、文字通りの字句は簡単なのに、その意味するところは深いということが、ことに文学作品では多いものである。また、登場人物の一挙一動にその人物の心理状態を重ね合わせる、ということもしばしば見られることである。「行間を読む」とは、言い換えれば「主体的な読み方をする」ということである。このような、含意とか、心理状態は、それが絶対的に正解と保証できない場合も多く、いわゆる入試問題では問われない部分である。しかし、だからこそ授業においては、学習者のさまざまな意見を募り、交換し合うことが必要であろう。指導要領の「言語活動」のウとして「内容を読み取って、それについて自分の考えなどを話したり、書いたりすること」とあるが、まさに今述べたようなことは、この活動に相当すると思われる。また、指導としては、文章を読ませる際に、そのような含意のある部分に意識が行くような設問を用意することが大切であろう。

(c) 音声面の重視：スピーチを通じて一音読の指導

指導の重点としてあげたのは2点であったが、指導要領の「言語活動」にはもう一つ次のような項目がある。

エ 文章の内容に応じて適切に音読すること。

確かに、リーディングで黙読している際にも、読み手の耳には実際の音が響いていなければ、文章の本当の意味での鑑賞は出来ないだろうと思われるので、この指摘は大切である。ただ、実際の指導では、かなり長い文章も多く、毎回音読する余裕はない。そこで、筆者は音声というものが非常に重要な役割をする歴史的なスピーチを扱うことで、それに代えた。

実際に扱ったのはキング牧師の *I Have a Dream* である。授業ではビデオを見せたり、背景知識を補いながら、20分のスピーチを数回に分けて解説し、毎回実際のスピーチを聞かせ、音読をした。特にリズムに注意を払った。授業だけでは足りないので、学習者にはLLでキングのスピーチのテープを録音させた。学期末に1人1分、自分で気に入った部分を実際にスピーチしてみる、という課題を課した。発表以前には、有名な箇所集中するのではないかと思っただが、実際に行かせてみると、20分のスピーチで取り上げなかった箇所はわずか2箇所、学習者は予想以上にバラエティに富んだ選択をした（もちろん、いくつかの有名な部分を選んだ者が多かったが）。発表者も聴衆も楽しんで発表しており、その点でも、このスピーチを取り上げた意味があったと思っている。

#### 3.3.2.4. おわりに

本稿では、高校3年のリーディングの指導として(1)論理的な文章を通じて文のつながり、パラグラフ構成の指導、(2)文学作品を通じて文章の「行間を読む」指導、(3)歴史的スピーチを通じて音声面指導、の3点をあげた。始めにも述べたように、それ以外の読みの技術は、これらが充分マスターできてからで決して遅くはないと考える。

## 4. まとめ—成果と課題

以上、2000年度のリーディングの活動を、学習指導要領や本校のシラバスをガイドラインにして読解と音読の両面から検証してきた。基礎期から実践期の前半（中学1年から3年まで）までは音読に、実践期の後半から発展期までは（高校1年から3年まで）読解に、指導の相対的な重点が置かれていたようだ。今後各期において、読解と音読のバランスを取っていくことが大切であるように思われる。

読解については、各期で副読本の利用法が報告されている。中高6年間にどのような副教材を生徒に読ませるべきかは重要なテーマであり今後論議を深めていきたい。

パラグラフの理解は主に実践期からの課題になる。実践期の末岡(3.2.2.2.)は、最初は典型的なパラグラフの構造を指導することを主張し、発展期の平原(3.3.1.1.)は、トピックセンテンスやマーカー（論理

展開指示語）、さらに様々な種類のパラグラフを指導したことを報告している。発展期（リーディング）の八宮(3.3.2.3.)は、(1)論理的な文章を通じて文のつながり、パラグラフ構成の指導、(2)文学作品を通じて文章の「行間を読む」指導の、2種類の読みの指導について具体例をあげて論じている。八宮(3.3.2.3.)が、パラグラフリーディングのストラテジーの一つとしてチャートの利用をあげているが、今後パラグラフリーディングの様々なストラテジーについても考察を深めたい。

久保野(3.2.1.1.)や平原(3.3.1.1.)が述べている速読や多読の実践については、中高6年間を見通したプログラムを今後作成していく必要がある。

音読については、内容に応じた音読指導の重要性が中学校と高等学校の『学習指導要領』にそれぞれ次のように記されている。「書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること」（『中学校学習指導要領』）「まとまりのある文章を音読したり暗唱したりして、英語の文章に慣れること」（『高等学校学習指導要領』の中の、「英語I」と「英語II」に関する「言語の取り扱い」）「文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する」（『高等学校学習指導要領』の中の、「リーディング」に関する「言語活動」）実践期で久保野(3.2.1.1.と3.2.1.2.)や末岡(3.2.2.3.)が、発展期で八宮(3.3.2.3.)が、題材や内容に応じた音読指導をそれぞれ報告している。

音読はスピーキングにつながる活動である。その意味で、基礎期で加藤(3.1.1.2.)や寺田(3.1.2.2.)が報告したペア練習やリードアンドルックアップなどの活動も今後重視していく必要があるだろう。

フォニックス(寺田恵一他(2001)：p.93-96)は本校のスピーキングのシラバスに入っているが、リーディングの基礎期の指導法としても、その長所と短所を今後論じていきたい。

〈注〉

本稿は、各学年担当者が分担して執筆したものを係(寺田)が整理し、まとめたものである。執筆の分担は以下の通りである。

1. はじめに……………寺田
- 2.1. 本校のリーディングのシラバス試案 ……寺田
- 2.2. 新『学習指導要領』におけるリーディングの扱い……………寺田
- 2.3. 海外のシラバス ……………久保野
- 3.1.1. 基礎期(中学1年)……………加藤
- 3.1.2. 基礎期(中学2年)……………寺田
- 3.2.1. 実践期(中学3年)……………久保野
- 3.2.2. 実践期(高校1年)……………末岡
- 3.3.1. 発展期(高校2年)……………平原
- 3.3.2. 発展期(高校3年)……………八宮
4. まとめ—成果と課題 ……………寺田

参考文献

Brown G. & Yule G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press

Carrell, P. L., Devine, J. & Eskey, D.E.(1996) *Interactive Approaches to Second Language Reading*. Cambridge: Cambridge University Press.

Carson, J.G. & Leki, I.(1993) *Reading in the Composition Classroom*. Boston: Heinle and Heinle Publishers.

Centre for Canadian Language Benchmarks.(2000) *Benchmarks 2000*. <http://www.language.ca>

Day, R.R. & Bamford, J.(1998) *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

Department for Education and Employment.(2000)

*National Curriculum*.  
[http://www.nc.uk.lnet/general/mfl\\_ks2.html](http://www.nc.uk.lnet/general/mfl_ks2.html)

Grellet, F.(1988) *Developing Reading Skills—A Practical Guide to Reading Comprehension Exercises*. Cambridge: Cambridge University Press.

ハイルマン, A.W., 松香洋子監訳(2000)『フォニックス指導の実際』 玉川大学出版部

Halliday M.A.K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. London, Longman.

門田修平・野呂忠司(2001)『英語リーディングの認知メカニズム』 くろしお出版

松香洋子(2000)『英語、好きですか』 読売新聞社

薬袋洋子(1999)『リーディングの指導』 研究社出版

文部省(1998)『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局

文部省(1999)『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局

O'Malley, J.M. & Pierce, L.V. (1996) *Authentic Assessment for English Language Learners*. Addison-Wesley Publishing Company.

近江誠(1992)『オーラル・インタープリテーション入門』 大修館書店

齋藤孝(2001)『声に出して読みたい日本語』 草思社

鈴木文子他(2000)「中高6年間を見通したシラバスの作成(1)—リスニングのシラバス」『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告第39集』

高梨康雄・高橋正夫(1987)『英語リーディング指導の基礎』 研究社出版

竹林滋(1994)『英語のフォニックス』 ジャパンタイムズ

手島良(1997)『スラすら・読み書き・英単語』 NHK出版

寺田恵一他(2001)「中高6年間を見通したシラバスの作成(2)—スピーキングのシラバス」『筑波大学附属駒場論集第40集』

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編(1992)『学習者中心の英文読解指導』大修館書店

Lesson 3 Part 3(p.17)

= "Who Discovered America?"

補足資料 1

Words and Idioms.

also = cf. I wrote to Jim, and my sister also wrote to him. / Jane is a good singer.

She can also dance. also は too よりも改まった表現

cf. too は文末に来ることが多い。

I wrote to Jim, and my sister wrote to him, too. / Jane is a good singer. She can dance, too.

around = about cf. I'll call you around eight o'clock.

land = 陸地 sea (海) に対する語

scientist = cf. science cf. pianist < piano; novelist < novel (小説)

in those days = その当時は、その時代は

cf. Women wore (wear の過去形) long skirts in those days.

Italian = イタリア人 (名詞)、イタリア語 (名詞)、イタリア (人) の (形容詞)

cf. Italy (イタリア)

German = ドイツ人の (形)、ドイツ語の (形)、ドイツ人 (名)、ドイツ語 (名)

a German scientist = マルティン・ワルトゼーミュラーという神聖ローマ帝国の地図制作者

map = 地図 a road map cf. atlas (地図帳)

過去進行形

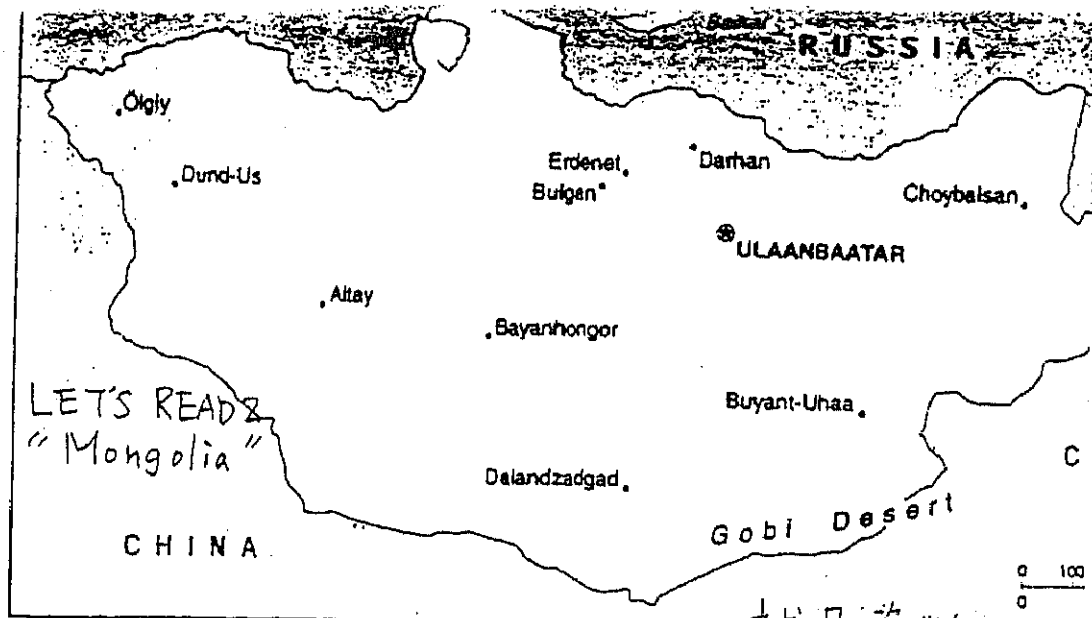
1. (a) I listened to the radio in my room. (b) I was listening to the radio in my room.
2. (a) I rained very hard in New York. (b) It was raining very hard in New York.
3. What were you doing last night? — I was studying for the exam.

Answer in English.

1. Who was making a world map around 1500?
2. Did he use Amerigo's name for the new land?

Put into English.

1. 彼らはその時朝食を食べていました。
2. たくさんの人たちがその湖の上で魚釣りをしていました。



補足資料 2

**Mongolia**

(*'The World Factbook 1999 - Mongolia'* (インターネット) より抜粋、一部書き直す)

**1. Location (場所)**

Mongolia is in Northern Asia, between China and Russia.

**2. Capital**

The capital of Mongolia is Ulaanbaatar. cf. Ulaanbaatar [ù:la:n bá:tɔ:r]

**3. Area (面積)**

1,568,000 k m<sup>2</sup> cf. Japan: 378,000 k m<sup>2</sup>  
It is almost four times as large as Japan.

**4. Population (人口)**

The population of Mongolia was 2,617,379 in July in 1999.

**5. Land (土地)**

very large semidesert and desert plains (平原) ; mountains in west and southwest; Gobi Desert in southeast cf. semi= 半分

**6. Ethnic groups (人種)**

Mongol (90%), Kazakh (4%), Chinese (2%), Russian (2%), other (2%)

**7. Religions (宗教)**

mostly Thibetan Buddhist, Muslim (4%)  
cf. mostly (たいてい) Muslim (イスラム)

**8. Independence (独立)**

March 13 in 1921 from China (右ページに続く)



## 高3英語 リーディング 1学期 4

## 全体の流れを考えての単語補充

## Tsunami

(A) 次の文章を読み、文中の空所(1)~(15)を下記(A)~(Y)の単語の中から適当なものを選んで埋めなさい。解答は記号で書きなさい。同じ記号は1回しか使えません。

A tsunami is a ( 1 ) of waves which are formed when a large earthquake or volcanic eruption occurs under the sea or on land near a coast. Many tsunami waves are quite small, but they can be ( 2 ) and may cause flooding and destruction ( 3 ) they surge onto coasts. Tsunami are named ( 4 ) the Japanese word for harbor waves. They are sometimes called tidal waves although they are not ( 5 ) by the movement of tides.

A tsunami is created when the level of the sea floor is moved up or down ( 6 ) a fault during an earthquake, or when part of a volcano collapses into the sea as it erupts. They are also created when an earthquake or eruption ( 7 ) on land near a coast. In all cases, the force of the ( 8 ) movements causes tsunami waves to ( 9 ) on the surface of the sea as the sea floor rises or falls. Out at sea these waves are no bigger than normal waves, but they travel at a much greater speed. They spread out rapidly in ( 10 ) directions moving at amazing speeds of about 800 km/h.

Like all waves, as a tsunami wave enters shallow water, its speed decreases, while its ( 11 ) begins to increase. Because the tsunami wave ( 12 ) so quickly, as it slows down, its height increases dramatically to form a towering wall of water which crashes onto a shore. Some tsunami waves can rise ( 13 ) 30 to 50 meters. Their height depends greatly on the ( 14 ) of the coasts and the depth of the water at the coast. Not all earthquakes and ( 15 ) which occur cause tsunami, and not all tsunami are massive.

- |             |               |
|-------------|---------------|
| (A) across  | (B) after     |
| (C) all     | (D) along     |
| (E) areas   | (F) as        |
| (G) caused  | (H) comes     |
| (I) crashed | (J) eruptions |
| (K) few     | (L) form      |
| (M) ground  | (N) height    |
| (O) in      | (P) massive   |
| (Q) occurs  | (R) original  |
| (S) seas    | (T) series    |
| (U) shape   | (V) to        |
| (W) travels | (X) volcanoes |
| (Y) yellow  |               |

補足資料 4

高3英語 リーディング 1学期 1 2  
言語論 3 (指示語の意味を取る問題)

5/22/00

■ 次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

5 If we look at the languages spoken in the world today, we notice very wide differences in <sup>(7)</sup>the use to which they are put. Most languages are the first language of some community and <sup>(8)</sup>serve the everyday functions of that community perfectly well. A few languages have a more restricted range of uses, for instance, until recently, Latin was restricted to certain uses within the Roman Catholic Church, particularly the conduct of services and formal communication internationally within the Church. Now its use is even more restricted and it is really only now used by a few people to read the literature originally written in that language.

10 On the other hand, some languages have wider functions than that of everyday communication and are used as official languages in <sup>(9)</sup>the administration of nations, in education to the highest levels and in literature of all kinds. Yet other languages enjoy an international role, English perhaps being the best example of <sup>(10)</sup>this <sup>(11)</sup>at the moment. English is the language of international air traffic, business communication, scientific publication and the lingua franca of tourism. Unfortunately, the differences in the range of roles that languages play frequently lead some people to believe that some languages which do not fulfil a wide range of functions are in fact incapable of <sup>(12)</sup>doing so.

15 In the view of some people, some languages are just not good enough. Not only do they not act as languages of science, of international communication, of high literature, they are <sup>(13)</sup>inherently inferior and could not be used in these ways.

20 <sup>(14)</sup>This sort of opinion can be seen particularly in societies where a minority language is spoken alongside a major language. A case of <sup>(15)</sup>this kind is the situation of Maori, the native Polynesian language of New Zealand. Linguists estimate that English is the first language of some 95 per cent of the New Zealand population and the only language of about 90 per cent. <sup>(16)</sup>People who identify themselves as Maori make up about 12 per cent of the New Zealand population of just over 3 million, but although the Maori language is regarded as a very important part of identity as a Maori, it is spoken fluently by perhaps 30,000 people. Because of social changes in New Zealand  
25 within the past five decades or so, Maori has seen its uses increasingly restricted till in many places

高3英語 リーディング 1学期 1 2-3  
文章の構造 (言語論 3)

5/23/00

文の概	1	languages spoken in the world → differences in the ( )
了 ( )	2	Most: the first language of some community / everyday functions
		A few: more ( ) ranges of uses e.g. Latin
い ( )	↓, (対比)	Some: wider functions / used ( ) of nations
		( ) in education to the highest levels
		( ) in literature of all kinds
う ( )	3	Yet others: international role e.g. English
		air traffic /business communication /scientific publication / ( ) of tourism
言い換え	3	the differences in the range of roles that languages play
		→ some languages which do not fulfil a wide range of functions are in fact incapable of <u>doing so</u>
主題の展開	3	→ they are inherently ( )
		<u>This sort of opinion</u> → in societies where a ( ) language is spoken alongside with a major language
具体例 1	3	A case of <u>this kind</u> : New Zealand, Maori vs English
		Maori: its use increasingly restricted → only at formal events